

児ノ口公園愛護会

成瀬

NARUSE
Junji

順次

さん に伺いました

都心の公園に自然を再生。住民が守り 住民が育てる「児ノ口公園」

コンセプトは「原風景」
昔の自然を再生都市の中心地に

——愛知県豊田市の中心地にある児ノ口公園は、もともとプールやブランコなどの遊具がある普通の都市公園でした。そこに暗渠になっていた五六川を地上に戻した小川をはじめ、里山、土や木々を復元させ、今のような公園にされたわけですが、そのきっかけはなんだったのでしょうか。

成瀬——学校にプールができたことや、老朽化などにより、プール経営が採算に合わなくなってきたということがあります。そこで豊田市では、五六川の再生とともに、「都心に水と緑を取り

戻し、やすらぎを生み出そう」という目的で、公園整備事業を計画しました。しかし、再生するにも費用がかかります。小さな子どもをもつ若いお母さんたちからは、子どもの遊び場がなくなるのは困ると、反対する声が出ていました。私もその数年前に市でヨーロッパの公園に視察に行き、フラットでシンプルな木が立っているのを見て、そういう公園をイメージしていましたが、里山をつくること聞いたときは、本当にそんなことができるのか疑問をもっていました。しかし、今になると、遮音や水の流れなど、自然の力がすごいと、自然から現在も進行形で学び続けているところですよ。そういう

面では、最初概念がしっかりしていたということは言えます。

遊びながら維持することが
長続きの秘訣

——行政の方がコンセプトをつくられ、それを地域の有志で構成された「児ノ口公園愛護会」や地域と、企業ボランティア「どこでもギバー隊」で、日常の維持・管理をされているというのが、いまの活動ということですか。

成瀬——地域住民でつくる「児ノ口公園管理協会」が公園の維持・管理を行い、地域住民の交流や環境学習を目指し、小川にホタルを飛ばす試みや、雑木林の手入れ、田んぼでのもち米づくり、四季折々の祭りの再現などを行っています。公園の維持管理はギブ・アンド・テイク方式です。高年者の人たち



児ノ口公園愛護会の皆さん

と上手にコラボレーションして、まず遊び、そしてその交換条件として作業をしてもらう。強要はしない、できる範囲でこなしてゆく作業です。無償ではなく有償で働いてもらいます。少し大変な仕事は企業ボランティアが毎月第二日曜日を活動日として三十人ほどで

聞き手

北山 真
編集委員



[writer] 駒崎文男
[photo] 河合隆富



成瀬順次(なるせ・じゅんじ)

1946年生まれ。商家「山屋」の七代目 旅籠から始まり雑貨店、喫茶店と今に至る。大学は体育会自動部卒業、クルマ大好き中年。今は環境を考えて低公害車に乗る。下町で生まれ児ノ口公園で育つ。現在は豊田市社会福祉協議会に勤務。高年者が寝込まないための支援の毎日。娘さんから父の日に贈られた帽子をかぶり夢中で児ノ口を語る姿は子どものまま。(写真は児ノ口神社の境内にて)

入ってくれています。これは無償です。本当にありがたいことと感謝しています。そして高度な作業は市で発注した業者が行うというように、無償と有償を使い分けていることが大きな特徴です。

基本的には、遊びながら、その間に少しずつでも草をむしってもらって、結果的に維持できればいいという緩めの考えでやっています。それが長続きしている秘訣だと思います。つらい仕事も遊んでいると、できてしまう。

先代の会長がよく言っていたのですが、古い人には懐かしい風景であり、若い人には新鮮に見える。同じことをやっても両方の入り口があり、「来る者拒まず、

去る者追わず」ということがいいのではないのでしょうか。

ここには先人の「思い」が込められている

——「児ノ口公園」は一九九六年三月に新しく生まれ変わり十年が経ったわけですが、見ていると、もつと歴史があつて、昔からあつたような気がしますね。

成瀬——鎮守の神様である児ノ口神社は昔からあつたのです。それを基盤に自然をつくり、それが同化して、タイムラグがなくなってきました。里山だつて育つていきます。小さいときは小さいときなりにバランスをとっているし、大

きくなつてもまったく違和感がありません。

土木学会デザイン賞をもらったときに、一人の人がきちんとした概念をもっていたからできたと言われました。概念もそうですが、それ以上に、子どもたちに楽しい場所を提供したいという「思い」が強かったのです。

戦前、ここは沼地でした。戦後、子どもの遊ぶところが無いということ、周辺の人たちが手弁当で、自然を残しながら公園にしたのです。そういう先人の「思い」とブレたことをしていないから、うまくいっているのです。

今では里山などの環境が戻ったことで、アオバズクなどのいろいろな生き物も戻ってきています。

私は、児ノ口神社への恩返しだと思つて活動をしてきました。私ここで生まれ、ここで育ててもらいました。この木に集まつて遊びをしましたし、自転車に乗れるようになったのも、プールで泳げるようになったのもここです。自分の人生の中で、いろいろなことを授かってきたところだからこそ、その恩返しをしたいと思つたのです。

ただ、最近では過保護になつてしまつて、これはいけない、あれはいけないと、子どもたちを排除する傾向も強くなっています。たとえば、川にホタルの幼虫を放流したことで、それが踏まれたりすることから、川に入れない。僕は、自分たちが子どもの頃遊んだのと同じように、子どもたちを川で遊ばせたいし、魚をつかまえてあげたいと思つています。公園内の黒板には、

「公園遊びの約束

自己責任、危機管理、自然共生」と表示しているのです。

また、ここは矢作川があることで、午前中と午後の風が違い、飛んでいる鳥の方向も違います。児ノ口という緑のオアシスが、風をコントロールしているのです。風は目に見えませんが、風の道や風の効用があると言われています。駅前や河川敷、児ノ口などに温度計を設置し、小学生に温度を計らせ、風の解析もしてみたいと思つています。

そして、季節の行事などを通じて、子どもたちや若いお母さんたちがもつと来てくれることを願っています。